

# No.7

warab1moch1

<https://github.com/warab1moch1>

## Contents

1. 確率積分 .....	1
---------------	---

## 1. 確率積分

$H$  : 連続適合<sup>1</sup>過程、 $W : \mathcal{F}_t$  によって生成された BM ( Brownian Motion ) であるとする。

いま、

$$\int_0^t H_s dW_s$$

なる確率変数を定めたい。あるいは、

$$\left( \int_0^t H_s dW_s \right)_{t \geq 0}$$

なる確率過程を定めたい。

改めて前提を整理すると、

$$\int_0^t H_s dW_s$$

において考えているのは、 $\omega \in \Omega$  をひとつ fix したとき、ある時刻  $s$  を与えると

–  $s \mapsto H_s(\omega)$  : 普通関数 (Path)

–  $s \mapsto W_s(\omega)$  : 普通関数 (Path)

であるように、それぞれはこれまでに定義してきた (見知った) 関数である。

一方で、上の確率変数を Lebesgue - Stieltjes 積分 ( $\Leftrightarrow$  Path  $\omega$  ごとの積分) として定めるのは無理であることが知られている。即ち、

---

<sup>1</sup>

**Definition 1.1:**  $X_t : \mathcal{F}_t$  - 適合であるとは、

$$\forall t \quad X_t : \mathcal{F}_t - \text{可測}$$

即ち、その時点までの情報で決まっていることを意味している

$$\sum_{i=1}^n H_{t_i}(\omega) (W_{t_{i+1}}(\omega) - W_{t_i}(\omega))$$

を考えられないということである。

これは、 $W_t$  が 2 次変分を持つことから、有界変動<sup>2</sup>な Path を確率 1 で持たないことによる。

そこで、Lebesgue 積分のように各点収束を考えるのではなく、分割における左側の関数値を代表点として  $L^2$  収束<sup>3</sup>を考えればよい、というのが確率積分（伊藤積分）の骨子である。

これより、積分の構成や証明などで高度な部分は割愛しつつ、満たしてほしい性質から天下り的に確率積分を考える。

例によって、 $\Delta : 0 = t_0 < \dots < t = t_n$  を  $[0, t]$  の分割とする。このとき、

$$A_t^\Delta := \sum_{i=1}^n H_{t_{i-1}} (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})$$

$$B_t^\Delta := \sum_{i=1}^n H_{t_i} (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})$$

なる確率変数を考える。それぞれ、各分割地点における左（右）側を代表点とした確率積分の近似である。

$$B_t^\Delta - A_t^\Delta = \sum_{i=1}^n (H_{t_i} - H_{t_{i-1}}) (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})$$

であるから、例えば  $H = W$  の場合を考えると、

$$\begin{aligned} B_t^\Delta - A_t^\Delta &= \sum_{i=1}^n (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})^2 \\ &\xrightarrow{|\Delta| \rightarrow 0} t \quad (\neq 0) \end{aligned}$$

つまり  $B_t^\Delta \neq A_t^\Delta$  である。

また、

$$\begin{aligned} B_t^\Delta + A_t^\Delta &= \sum_{i=1}^n (W_{t_i}) + W_{t_{i-1}} (W_{t_i}) - W_{t_{i-1}} \\ &= \sum_{i=1}^n (W_{t_i}^2 - W_{t_{i-1}}^2) \\ &= W_t^2 - 0 \\ &= W_t^2 \end{aligned}$$

よって

$$A_t^\Delta \simeq \frac{1}{2} (W_t^2 - t)$$

$$B_t^\Delta \simeq \frac{1}{2} (W_t^2 + t)$$

<sup>2</sup>ブラウン運動が無限にギザギザしているという性質は、積分において都合が悪いということである。

<sup>3</sup>これより、確率収束していることが言える (∵ No.5) **こちら辺ブラウン運動の回を見直して直しておく**

と考えられる。特に、上の  $A_t^\Delta$  の右辺はマルチンゲールであり、性質がよさそうである。

これを念頭に、左側を代表点とするものを確率積分であると考え、今後の見通しがよさそうである。

例えば、

$$\Delta : (0 = t_0 < \dots < s = t_k < \dots < t = t_n)$$

として、 $[0, t]$  の  $s$  を通る分割を以下では考える。このとき、

$$\begin{aligned} \mathbb{E}[A_t^\Delta | \mathcal{F}_s] &= \mathbb{E}\left[\sum_{i=1}^n H_{t_{i-1}} (W_{t_i} - W_{t_{i-1}}) | \mathcal{F}_{t_k}\right] \\ &= \sum_{i=1}^k H_{t_{i-1}} (W_{t_i} - W_{t_{i-1}}) \\ &\quad + \sum_{i=k+1}^n \mathbb{E}\left[\mathbb{E}[H_{t_{i-1}} (W_{t_i} - W_{t_{i-1}}) | \mathcal{F}_{t_{i-1}}] | \mathcal{F}_{t_k}\right] \\ &\quad (\because \mathcal{F}_{t_k}\text{-可測性と Tower Law}) \\ &= A_s^\Delta + \sum_{i=k+1}^n \mathbb{E}[H_{t_{i-1}} \mathbb{E}[W_{t_i} - W_{t_{i-1}} | \mathcal{F}_{t_{i-1}}] | \mathcal{F}_{t_k}] \\ &= A_s^\Delta (\because W \text{ はマルチンゲールだから増分は } 0) \end{aligned}$$

よって、 $\int_0^t H_s dW_s$  は、 $t$  についてマルチンゲールになるべき量である

加えて、天下りのあるが、 $H$  : 有界として

$$\begin{aligned} \mathbb{E}[(A_t^\Delta)^2] &= \mathbb{E}\left[\sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n H_{t_{i-1}} H_{t_{j-1}} (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})(W_{t_j} - W_{t_{j-1}})\right] \\ &= \sum_{i=1}^n \mathbb{E}[H_{t_{i-1}}^2 (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})^2] \\ &\quad + 2 \sum_{i>j} \mathbb{E}[H_{t_{i-1}} H_{t_{j-1}} (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})(W_{t_j} - W_{t_{j-1}})] \end{aligned}$$

であるから、Tower Law により

$$\begin{aligned} (\text{第一項の中身}) &= \mathbb{E}\left[\mathbb{E}[H_{t_{i-1}}^2 (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})^2 | \mathcal{F}_{t_{i-1}}]\right] \\ &= \mathbb{E}\left[H_{t_{i-1}}^2 \mathbb{E}[(W_{t_i} - W_{t_{i-1}})^2 | \mathcal{F}_{t_{i-1}}]\right] \\ &= \mathbb{E}[H_{t_{i-1}}^2 (t_i - t_{i-1})] \quad (\because \text{分散}) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} (\text{第二項の中身}) &= \mathbb{E}\left[\mathbb{E}[H_{t_{i-1}} H_{t_{j-1}} (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})(W_{t_j} - W_{t_{j-1}}) | \mathcal{F}_{t_{i-1}}]\right] \\ &= \mathbb{E}\left[H_{t_{i-1}} H_{t_{j-1}} (W_{t_j} - W_{t_{j-1}}) \mathbb{E}[(W_{t_i} - W_{t_{i-1}}) | \mathcal{F}_{t_{i-1}}]\right] \quad (\because \text{独立増分性}) \\ &= 0 \end{aligned}$$

より、

$$\mathbb{E}[(A_t^\Delta)^2] = \mathbb{E}\left[\sum_{i=1}^n H_{t_{i-1}}^2(t_i - t_{i-1})\right]$$

$$\xrightarrow{|\Delta| \rightarrow 0} \mathbb{E}\left[\int_0^t H_s^2 ds\right]$$

である。これより、冒頭で正体がつかめなかった『確率積分』の2乗の期待値は、(適合過程として) 知っている関数の2乗の期待値に収束していることがわかる。

これまでの結果をまとめると、 $\int_0^t H_s dW_s$  は、次の伊藤の等長性という式を満たすべきである。

$$\mathbb{E}\left[\left(\int_0^t H_s dW_s\right)^2\right] = \mathbb{E}\left[\int_0^t H_s^2 ds\right]$$

このとき、確率積分  $\int_0^t H_s dW_s := I$  は  $L^2$  可積分でマルチンゲールであり、

$$\|I\|_{L^2(\Omega, \mathbb{P})}^2 = \|H\|_{L^2(\Omega \times [0, t], \mathcal{P}, \mathbb{P} \times \lambda)}^2$$

と言える<sup>4</sup>。

これより、この  $I$  の2次変分を考えたい<sup>5</sup>。  $I = \int_0^t H_s^2 ds$  において、

-  $H_s(\omega) : \omega$  を与えるごとに生成される連続な Path

-  $ds$  は普通の Lebesgue 積分

であるから、 $\omega$  を与えるごとに値が確定する積分であることに注意する。

## 2次変分の性質(ちゃんとしたやつ)のつける

- 0 スタート - 増加 - 連続なパスを持つ -  $A^2 - X$  がマルチンゲール このとき、上の3つは直観的に成立を期待できる。そこで、

$$\Delta : (0 = t_0 < \dots < s = t_k < \dots < t = t_n)$$

として、

$$X_t^\Delta := \sum_{i=1}^n H_{t_{i-1}}^2(t_i - t_{i-1})$$

$$X_s^\Delta := \sum_{i=1}^k H_{t_{i-1}}^2(t_i - t_{i-1})$$

とおくと、

<sup>4</sup>右辺の  $\mathbb{P}$  は確率測度で  $\lambda$  はルベーグ測度、また  $\mathcal{P}$  はこの積分を成立させるための(舞台設定としての) 加法族である。

<sup>5</sup>証明なしで以下を考えることになるが、確率積分  $\int_0^t H_s dW_s$  が連続であると都合がよい

$$\begin{aligned}
\mathbb{E}\left[(A_t^\Delta)^2 - X_t^\Delta | \mathcal{F}_s\right] &= \mathbb{E}\left[\sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n H_{t_{i-1}} H_{t_{j-1}} (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})(W_{t_j} - W_{t_{j-1}}) \right. \\
&\quad \left. - \sum_{i=1}^n H_{t_{i-1}}^2 (t_i - t_{i-1}) | \mathcal{F}_s\right] \\
&= \sum_{i=1}^n \mathbb{E}\left[H_{t_{i-1}}^2 \left((W_{t_i} - W_{t_{i-1}})^2 - (t_i - t_{i-1})\right) | \mathcal{F}_{t_k}\right] \\
&\quad + 2 \sum_{i>j} \mathbb{E}\left[H_{t_{i-1}} H_{t_{j-1}} (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})(W_{t_j} - W_{t_{j-1}}) | \mathcal{F}_{t_k}\right]
\end{aligned}$$

であるから、

第一項の各項は

$-i \leq k$  のとき

$$= H_{t_{i-1}}^2 \left( (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})^2 - (t_i - t_{i-1}) \right)$$

として可測性より外に出せる

$-i > k$  のとき

$$\begin{aligned}
&= \mathbb{E}\left[\mathbb{E}\left[H_{t_{i-1}}^2 \left((W_{t_i} - W_{t_{i-1}})^2 - (t_i - t_{i-1})\right) | \mathcal{F}_{t_{i-1}}\right] | \mathcal{F}_{t_k}\right] \\
&= \mathbb{E}\left[H_{t_{i-1}}^2 \mathbb{E}\left[(W_{t_i} - W_{t_{i-1}})^2 | \mathcal{F}_{t_{i-1}}\right]\right] \\
&\quad - \mathbb{E}\left[H_{t_{i-1}}^2 (t_i - t_{i-1}) | \mathcal{F}_{t_k}\right] \quad (\because t_i - t_{i-1} \text{ は定数}) \\
&= \mathbb{E}\left[H_{t_{i-1}}^2 (t_i - t_{i-1}) | \mathcal{F}_{t_k}\right] - \mathbb{E}\left[H_{t_{i-1}}^2 (t_i - t_{i-1}) | \mathcal{F}_{t_k}\right] \quad (\because \text{独立増分性}) \\
&= 0
\end{aligned}$$

また、第二項の各項は  $i > k$  のとき

$$\begin{aligned}
&= \mathbb{E}\left[\mathbb{E}\left[H_{t_{i-1}} H_{t_{j-1}} (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})(W_{t_j} - W_{t_{j-1}}) | \mathcal{F}_{t_{i-1}}\right] | \mathcal{F}_{t_k}\right] \\
&= \mathbb{E}\left[H_{t_{i-1}} H_{t_{j-1}} (W_{t_j} - W_{t_{j-1}}) \mathbb{E}\left[(W_{t_i} - W_{t_{i-1}}) | \mathcal{F}_{t_{i-1}}\right] | \mathcal{F}_{t_k}\right] \\
&= 0 \quad (\because \text{独立増分性})
\end{aligned}$$

であるから、

$$\begin{aligned}
\mathbb{E}\left[(A_t^\Delta)^2 - X_t^\Delta | \mathcal{F}_s\right] &= \sum_{i=1}^k H_{t_{i-1}}^2 (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})^2 - \sum_{i=1}^k H_{t_{i-1}}^2 (t_i - t_{i-1}) \\
&\quad + 2 \sum_{k \geq i > j} H_{t_{i-1}} H_{t_{j-1}} (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})(W_{t_j} - W_{t_{j-1}}) \\
&= (A_s^\Delta)^2 - X_s^\Delta
\end{aligned}$$

となり、所望の結果を得る<sup>6</sup>。

---

<sup>6</sup>ここで、 $(A_s^\Delta)^2$ への変形には一般形  $H_{t_{i-1}} H_{t_{j-1}} (W_{t_i} - W_{t_{i-1}})(W_{t_j} - W_{t_{j-1}})$  の対角線領域と三角形領域の和が  $k \times k$  の正方形となることを用いた。